

## 日本の歴史 45

「ニッポン再発見」倶楽部著 (三笠書房 知的生きかた文庫 2014)

### 『日本は外国人にどう見られていたか』

本書の請求記号 210.58 ||Nipp

稲垣宏行

外国人観光客は年々増加しています。11月19日付の京都新聞朝刊によれば、2015年の1月から10月までで1,631万人を超えたと言います。彼らは日本に対してどんな思いを抱いているのでしょうか。本書は、江戸期から明治初期の日本を見聞した欧米人からの証言を集めたものです。

スウェーデンの医師ツェンペリーは、18世紀後半にして日本人の中に左側通行の概念が定着していたことに驚きと賞賛を述べていました。イギリスの外交官オリファントは江戸期日本の識字率の高さに言及し、庶民までもが読書に親しんでいることに感心したと言います。アメリカの動物学者モースは、錠前を付けた民家が無いほど治安がよく、外套に小銭を入れたままにすれば、召使がわざわざ返しに来る実直さに驚嘆していました。日本は江戸期以前から治安が良いことで海外から認知されていたようで、スペイン宣教師ザビエルも「こんなに泥棒が少ないのは珍しいです」と自らの書簡に書き残しているほどです。

概ね好評意見が多いのですが、国民性の面では、日本人が名誉に強い執着心を持ち、些細な無礼で怒り出す堪え性の無い気質だと感じた外国人も少なくなかったようです。また、その名誉の守り方が残酷で理解し難いと感じていたようです。長崎・平戸のオランダ商館長カロンは武士の切腹が「名誉への執着心」の最たるものだと述べています。文化面でも日本人の頻繁な入浴が奇異に映り、デンマーク軍人のスエンソンは、そのせいで女性は若くして老化してしまうのではないかと恐怖心を抱いていたほどでした。

日本人としても納得のいく意見も本書でいくつか見られました。例えば、アメリカ海軍提督ペリーは、饗応の際に出た食事の量が少なすぎると不満を漏らしていたと言います。評者も初めて外国へ行った際、向こうの食事量が「1日2食で足りる」

ほど多かったと感じた記憶がありましたが、逆の事例が幕末期の日本で生じたようです。イギリスの日本学者チェンバレンも、明治初期の日本を訪れ、欧米では常食の肉やパン、牛乳などがメニューに無いことに触れて「こんな食事ではとても生きていけない」と嘆いたそうです。この他にも、日本人である我々も意表を突かれるような指摘が本書には登場します。江戸期の女性が白粉を塗りたくった化粧をしていた理由が、感情を露わにするのが不作法なので、化粧で表情を読み取られないためだという事例など正にそうだと思います。

現在、日本はTPP加盟やマイナンバー制度など、多くの改革を打ち出しています。明治期日本も、欧米による侵略への恐れもあって、先進国になるべく西欧化を急ぎました。しかし、それは水質汚染などの弊害をもたらし、海外からも「牛肉を食べてビールを飲めば一人前になれると思っている馬鹿な鳥」と痛烈な風刺をされました。「西欧化を急ぐあまり、本来の姿を見失いつつある」と、在りし日の日本を懐かしみ、残念がる欧米人も少なくなかったそうです。

現在の日本は物質的に豊かですが、経済は未だ停滞気味で犯罪も少なくありません。江戸期から明治初期は経済的に豊かではなく、調度も最小限でしたが、海外の目から日本人は陽気で満たされているように映っていたと言います。

本書を一読して感じることは、日本本来の長所を見直し、未来にも活かしていくことです。前述のように外国人観光客は増加しています。彼らに恥じることの無い日本になるためには、国として一貫したものを持ち続ける必要があります。そのためにも、周囲の流れにばかり気を取られないことが大事だと感じます。

いながき ひろゆき (司書・情報サービス課)